

## わづ一度会いたい

裾野市内中学校

ハ木さん

私の父は鳥が好きだ。中でも特に猛禽類を好む。猛禽類とは、狩りをするために視力や脚力が発達し、口ばしや爪は強く、鋭く成長する鳥のことを指す。大きくて鷹とフクロウの中間に一分されるが、私が観察をするのは前者の仲間である。

私と父は、よくそのような猛禽類を探しに出かける。私たちが猛禽類を観察する主なスポットは、家から車で三十分ほどの場所にある田畠の広がる野原だ。田んぼや畑の脇には透き通った水が絶え間なく流れている、春には赤紫色のレンゲの花が咲き、秋には小道に黄色いイチョウの葉のかべットが敷かれる、とてもきれいな所だ。川や畑の周囲にはたいていカモやハト、ネズミなどが生息している。だから、それらを捕食する猛禽類も見られるというわけだ。日本に生息する猛禽類の多くは毎冬、同じ場所に飛来する渡り鳥でもあるため、決まってこの場所に行くのが私たち親子の冬の楽しみだった。

だが、私たちが数年間通つたり、見られなくなつた猛禽類がいる。オオタカだ。通い始めたころには獲物を食べたり、小道を横切る姿が

見られたが、昨年は影すら見えなかつた。オオタカは父の大好きな鳥であり、野原の王者と言える存在でもあつたため、彼らを見られなくなつたのは本当に残念だった。

オオタカが飛来しなくなつた理由について私が考えた仮説を述べたい。一つ目は、気候変動による影響、特に地球温暖化だ。この影響はオオタカが飛来していた野原でも着実に見られる。最寄りの気象観測所における年平均気温が、じつは九十年間で一度も上昇しているのだ。また、ヨシキリ、イワツバメ、アマサギなどの夏鳥の飛来時期がここ数年間で一ヶ月ほど早まつてゐる。温暖化は、間違いなく渡り鳥の飛来行動に影響を与えてゐることがわかる。

二つ目は、人間の活動によるストレスだ。オオタカをよく見かけた並木道で、ある年、水道管の工事が数年間行われた。同じ野原では、毎年イワツバメの群れの飛来も確認でき、トンネルの中で子育てをしていたのだが、そのトンネルの工事が行われてからは、確認できるイワツバメの個体数が減つたり、全く見られない年もあつた。同様のことがオオタカにも起こっている可能性は十分に考えられる。

全ては私の仮説でしかなく、オオタカの飛来が見られなくなつた本当の理由はわからない。しかし、人間の存在や生活が彼らに向らかの影響を及ぼしてゐるのは確かだと思う。一度飛来をやめてしまつたオ

オタカをまたここに呼び戻せるかどうかもわからない。でももし戻つてくれたら、オオタカが生活を始める際に、人間が何をすることを考えてみた。

まず、オオタカが好む十メートル以上の高木を残す。オオタカが捕食する小動物、ネズミや小鳥から間接的に農薬を摂取することを避けたま、接近する農地では無農薬か少量の農薬使用に努める。人通りの少ない場所であれば、繁殖期は交通規制などができるば安心してヒナを育てられるだらう。また、小さな努力としては、道を歩く一人ひとりが必要以上に草木を踏み荒らして小動物の繁殖を妨げないようにする。観察は遠くからやつと行つことを心掛けたい。少しづつでも、でもねじとは何でもやうひ。だから私は、せめてこれから、毎年野原の様子を記録しようとした決めた。具体的には、草木の高さ、量、川の水量、月毎の平均気温などの野原の環境の記録だ。これらの記録と、猛禽類の飛来時期を照合するとして、野原周辺の環境が彼のどうな影響を与えているのかを、明確にすることができるだらう。

最後に、父だけでなく、私自身がオオタカの飛来を切望する理由について述べておきたい。彼らオオタカは、あの野原に飛来しなくなつたとしても、私が気にしてしまなくてそんなことに関わりなく、もつと暮らしやすい別の野原を見つけているかもしけない。しかし、も

しオオタカ以外の猛禽類の飛来まで途絶えてしまつたりなるだらう。彼らが捕食するはずの小動物は増殖し、農作物を荒らす。それならば、自治体は害鳥、害獣に指定し、駆除されてしまつかもしない。

人間の生活によつてオオタカが消え、次にはカモやネズミが消える野原を想像すると、とても寂しくて悲しい。観て樂しいだけではない。オオタカの存在自体が人間にもメリットがあるので。猛禽類が人間に協力する意思がないとしても、共存のために人間が考へ、お互いの存在が必要と供給のサイクルを満たすようにしていかなくてはいけない。私たちがほんの少し、オオタカの生活のために配慮するだけできつとこの願いは叶ははずだ。

あの野原で、私は、もう一度オオタカに会いたい。